

は語助なり、

〔倭訓栞前編三十六〕よ 夜は世のうつりかはるが如し、同語なるべし、日本紀に更をよめり、夜に

初更、二更といふより出たり、

よる 夜をよともよるともいへり、體用の詞也、日をひるとも轉ずるが如く、およるは御夜也、お

ひなるは御晝なる也、

〔八雲御抄三上〕夜 むばたま さよ ひとよ次第にかく も、よ ちよ ぬばたまは本説

云、萬葉にむばたまといへり、又ぬばたまともいへり、萬には兩説なり、五百ないほ 夜 ゆきもよ

あめもよ あま夜 月夜 玄も夜 よは みじかよ ながくしきよ さよ中小夜 萬

十に、玄たよのこひとよめり夜中 よごろ よかず源氏 よひ、かりやうくる心也 ふ よくたち

同事也、源なり、

〔伊呂波字類抄伊疊字〕一霄セウ 一夜 一夕 〔同天象〕信フタ夜タヨ也、

〔和爾雅二時〕暮夜 夜分後漢書注、初夜シヨ之ヤ初更 五夜分ニ一夜爲ニ五 五鼓ゴ更ゴ 一昔セキ也 一夕 子夜子時

午夜ゴヤ半ハ夜ヤ也、 闌夕ランセツ 終夜シウヤ 盡宵ジンセウ 徹宵テウセウ 盡夕ジンセツ 極夜ゴクヤ 通宵ツウセウ 通宵ツウセウ 遙音ヨウオン永エ夜ヤ 修夜シウヤ上上

〔萬葉集十二〕寄物陳思古今相聞往來歌類

念管座者苦毛夜干玉之夜爾至者吾社湯龜オモヒツラシバクケシモスバクノヨルニシナラバワレコソユカガ

〔萬葉集抄三〕ぬば玉ともうばたまともいへるは、よるをいふなり、うばたまとは、くろきたまと

云心也、よるはくろきいろなれば、うばたまと云べし、

〔竹取物語〕中納言略 〇中 みるそかにつかさになまして、をのこどもの中にまじりて、夜をひるになし

てとらしめ給ふ、

〔後撰和歌集一〕だいゑらす よみ人ゑらす